

***** 2014.3.26 発行 *****

Kwacha (クワチャ) はチェワ語で「夜明け」を意味します。

編集・発行：日本マラウイ協会
〒102-0082 東京都千代田区一番町 23 番地 3
日本生命一番町ビル 5 階
公益社団法人 青年海外協力協会 気付
Tel. 03-6674-1331 E-mail: japan.malawi@gmail.com
Home Page <http://www.joca.or.jp/malaw/malawi-j.htm>

【マラウイ共和国】

面積：118,484 平方 km (日本の約 1/3)
人口：1538 万人 (2011 年世界銀行)、首都：リロングウェ
独立：1964 年 7 月 6 日、公用語：英語、チェワ語
政体：共和制、大統領：ジョイス・バンダ
為替レート：US\$ 1 = 415.867 (3 月 8 日現在)
MK 1 = 0.24 円 (3 月 8 日現在)

【日本マラウイ協会 (Malawi Society of Japan)】

日本とマラウイ両国間の理解を深め、文化、スポーツ、経済、科学技術等の協力を通じ、相互の繁栄に寄与することを目的とする任意団体です。趣旨をご理解の上、広く各位の入会を希望します。会員数:202人(3月1日現在)



マラウイ共和国 国旗



イベント グローバルフェスタ 2013

平成 3 年度 3 次隊
自動車整備 三浦喜勝

2013 年 10 月 5・6 日 (土・日)、東京・日比谷公園で「グローバルフェスタ JAPAN 2013」が開かれました。10 月 6 日の国際協力の日を記念して開催されるイベントで、1991 年から行われた「国際協力フェスティバル」から引き継がれ、今回で 23 回目となりました。

万 8 千人の来場者があったそうです。会場は広く、エリア別にテントの屋根の色が異なり、メインステージを囲むようにイエローエリア (大使館、緊急援助など)、大噴水のまわりにはグリーンエリア (国際機関、政府機関など) とホワイトエリア (共催者、企業など)、その後方の芝生広場はブルーエリア (人権、環境、教育など)、次にレッドエリア (ジェンダー、JOCA 青年海外協力協会など) とスカイエリア (農村開発、保健医療など) といった配置で、私たち日本マラウイ協会はレッドエリア内の 1 つのテントで出展しました。

いう小さな木彫りの象は手頃な大きさが好評でした。また、チェワ語辞典も数冊売れました。同じテント内では「マラウイ母の会」のお母さん方が手作りのチテンジバックやシュシュなどを販売しました。チテンジから作られたバックはカラフルでデザインも豊富で来場者には大変好評でした。テントには元隊員や旅行の情報収集に来る人、バックや木彫りなどを買い物に来る人で盛り上がりました。また、6 日にはマラウイに赴任される西岡周一郎大使ご夫妻が訪ねて来て下さり、みんなで記念撮影するといったこともありました。私は 6 日のみのお手伝いでしたが、皆さんとの会話や会場の散策など楽しい一日を過ごすことができました。



▲ 西岡周一郎マラウイ大使ご夫妻とともに

国際協力をより身近なものに感じて、国際協力の現状・必要性などについて理解と認識を深めてもらうことが目的で、今回のテーマは「見つけよう！世界とつながるあなたのトピカ」でした。

2 日間ともあいにくの天気でしたが、のべ 7

テントではマラウイ国内の写真パネルや協力隊活動を紹介するパネルを展示しました。また、前月に中川 総 OB (H3-3 栄養士) がマラウイに里帰り？した際に持ち帰った民芸品や絵画、それとチェワ語辞典統合改訂 2 版などを展示、販売しました。カレンダーエレファントと

レポート ウォームハートプロジェクト 進行中

マラウイ派遣青年海外協力隊員の本来業務以外の活動を支援するため当会が資金提供する「マラウイウォームハートプロジェクト」の申請が 2013 年 10 月 11 日に JICA マラウイ事務所を通じて次のようにあった。10 月 23 日審査の結果採択し、25 日に野呂会長の承認を得て、28 日に送金した。

申請者：小川 由 隊員
平成 24 年度 1 次隊 (野菜栽培)
プロジェクト名：ムランジェ職業訓練盲学校女子寮リノベーションプロジェクト
送金額：247,604 円相当の米ドル額

***** 中間報告 *****

平成 24 年度 1 次隊
野菜栽培 小川 由

Muli bwanji ? わたしは、ムランジェ山の麓にある職業訓練盲学校に 4 代目として配属されている隊員です。この学校では視覚障害がある

18～55歳前後の人を対象に、点字や農業、ビジネスマネジメント等の授業を10ヶ月間で行っています。生徒はマラウイ全国から集まり、キャンパス内にある寮での共同生活を送りながら日々の訓練を受けています。

2012年8月の赴任後、例年どおり9月末に生徒を迎えて学校は始まりました。しかし、築40年を超えて老朽化が進んだ女子寮は懸念されていました。その状態のひどさは誰の目にも明らかで、初めて宿舎に入ったとき、わたしは言葉に詰まりました。ここに生徒を寝かせているのが信じられない、これはいけなないと思いました。もちろん事の深刻さは学校職員みんながわかっていました。それでもなす術なく、政府が動いてくれるのをただ待つのみでした。

ようやくトタンが届き、いよいよ工事が始まるかと思われました。が、木材等その他の資材が一向に送られてきません。そうこうしているうちに雨期になり、そしてクリスマスホリデーとなりました。生徒は各々の自宅に帰ります。その間になんとしても修理を完了させなければなりません。でも、叶いませんでした。激しく降り続く雨に耐えきれず、女子寮の屋根には穴がいくつも開きました。

それから年が明け、授業再開予定日はいくどとなく延期されました。好転の兆しもなく、もどかしさにも飽きてきて活動の対象を学校外で探すことも視野に入れ始めたころ、一つの決断がされました。それは、女子寮の修理がされるまで、男子寮の一部屋を空けて女子部屋にするというものでした。4月、こうして授業はかろうじて再開されました。ですが、とうとう女子寮が着工されないうちに修了となりました。

その後、もしかすると次は生徒を受け入れない、という話もありました。個人的にはそのほうがいいかもしれないとも思っていました。けれども政治的な理由もあるようで、去年も9月に生徒がやってきました。今回は最初から女子は男子寮の一部屋を使っていました。しかし、いつまでもここに寝泊りさせておくわけにはいかない。そう思い、ウォームハートプロジェクトに申請いたしました。

申請書類提出後、異例の二週間という短期間で支援の決定・送金をしていただきました。



▲ 改修された女子寮の外観

雨期に入る前に完成を…ということだったのですが、ここはマラウイ。進捗は pang'o' no pang'o' no でした。それでも大まかな工事は4

週間ほどで終わりました。ついに年明けから女子生徒が女子寮で生活できることとなりました。

1月、休暇から生徒が戻ってくる予定の日。なんだか緊張しました。去年の悲劇はここから始まりましたから。でも、今年は違いました。ちゃんといます。だいたい一週間のあいだにみんなが揃うということで、早く到着した生徒とスタッフでベッドやマットレスの移動させました。天井を予算に入れていなかったため、現在梁はむき出しのままですが、まったく見違えました！みんなが笑顔で答えてくれるのが嬉しくて、“kunyumba kuli bwanji?” 家(寮)はどう? が定番の挨拶になっています。

今後、資金の残りに学校側がどうかやりくりしてお金を足し、天井をつける工事を行う予定です。もうしばらく時間はかかりそうですが、完了の報告ができる日まで根気良く進めていきます。今後ともどうぞよろしく願いいたします。

投稿

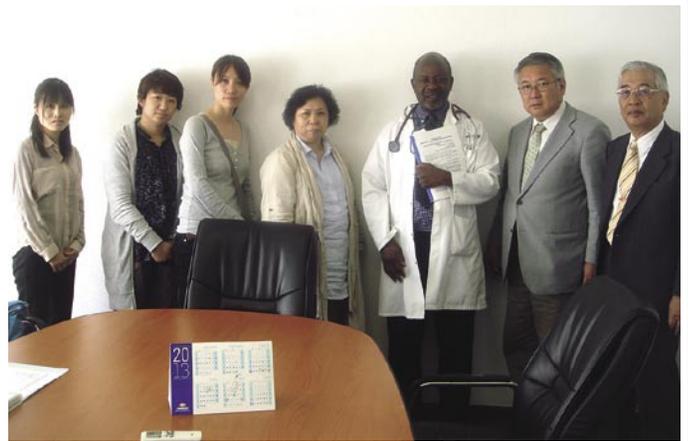
母子保健から共同プロジェクト発展へ

イムス横浜国際看護専門学校
副校長 佐藤和子

このプロジェクトは、マラウイ共和国(以後、マラウイ)との共同事業への発展を願い、妊娠前から 幼児期までに必要とされる対策を政府及び地域社会と連携し、母子保健活動を通じて、健康的な生活を支援することを目的に、現地調査、医療施設の視察及び政府機関への訪問を行った。現地入りしたメンバーは、コーディネーターの秀明大学 芝田征二、香川大学 上原正宏、情報科学の専門家 折本綾子を中心に、保健領域から佐藤和子、山梨めぐみ、佐藤豊子、本村栄里子の看護師4名の計7名であった。訪問先は、医学、看護学部をもつ国立大学2学部、国立、私立病院5施設と、主旨説明のために政府各機関へ赴いた。

1. 看護教育から考える母子保健

まず、国立マラウイ大学カムズ看護学部(リロングウェ・キャンパス)を訪問した。看護領域は、家族、小児、地域、助産、周産期があり、さらにブランタイアに4つのコースを有している。マラウイ政府は、母性・小児を重要課題としており、修士課程を充実し、2014年度からは博士課程を設置し、看護師、医療指導者となる人材の育成に重



▲ マラウイ訪問団と現地医師

点におく看護教育の中核となる大学であった。

他は、ダエヤン看護大学(韓国ミッション系病院付属)である。この大学は、ダエヤンルーク病院に併設され、設立2年半の新大学である。学費等は無料で運営し、学生寮もあり、地元の人材育成に貢献する目的を持っている。初年度に受験資格の制限をせずに学生募集をしたところ、定員30名に1400名余りの応募があり、2年目は、成績を選抜条件に入れた。大学の設備は、図書館、IT室、実習室、科学実験室、教室、ラウンジ、学食等があり、留学生も在籍し、小規模ながら、看護教育と共に地元の女性の教育向上に貢献できる大学として期待できる。反面、マラウイの初等教育(アメリカとの連携)、中等教育(日本との連携)の現状を踏まえると、現在の医療従事者の技術や知識の状況を把握し、今後の人材育成への支援策を具体的にかつ早急に検討することが重要であると思われた。

2. 医療施設から見える母子保健

医療施設は、母性、小児系の病棟を中心に見学した。マラウイ政府は、妊婦健診の推進、施設分娩を奨励しており、無料で診療している国立病院の利用者が多かった。分娩数は、クイーンエリザベス中央病院(ブランタイア市)の例でみると、自然分娩500～700件/月、帝王切開200件/月、妊産婦死亡0～5件/月、乳児死亡2～5人/月であった。妊婦健診時は、経過記録が記載され母子手帳のようなハンドブックを持参し血圧や体重測定を行った後、医師による診察を受けていた。また、韓国企業からの支援のあるダエヤンルーク病院の分娩件数は、100～150件/月で死亡件数は1～2件程度である。死亡例があると調査が入るので分娩には注意を払っていると院長は話していた。妊産婦、新生児死亡に対して、努力と改善がされてきている様子が伺えた。

産科病棟の構成は、産前・産後病棟、分娩室、カンガルーケア(母子同室)に区分けされ、母親と新生児と一緒に過ごしていた。新生児室は、体温管理、感染防止、母乳栄養に重点が置かれ、母親への啓蒙資料が壁に掲示されていた。病院全体は、手洗いや清掃が奨励され、JICAによる5S運動が浸透しており清潔に保たれていた。しかし、医療機器、コンピューターシステムの導入は、病院により差があり、維持・保守にも課題があった。



▲訪問した村で

3. 地域住民から見える母子保健

マラウイ在住の末日、聖徒イエス・キリスト教会と扶助教会会員に協力をいただき、首都郊外に在住する女性たちの調査ができた。その結果、妊婦健診、施設分娩が普及している事が実感できた。しかし、母子の生活環境は都市部とその周辺地域や所得格差により違い、都市に近い住民の居住地域を訪問したが、生活環境は決して恵まれたものではなかった。

分娩は施設で行われるようになったが、主要道路を外れると舗装道路は少なく、レンガ造りの家一つの区域に集約し村を形成していた。飲料水は各支援団体が井戸を整備し清潔な水の提供を行っているが、多くは生活水に河川水を利用している。低所得者が多いことを考えると、母子の健康維持のために地域に介入できるシステム、女性の生涯にわたる保健活動として活動できることが重要である。

母子保健活動は、生活、文化に密着しており、実際にマラウイの多くの人々と出会ったことが貴重な資料となった。また、プロジェクトを理解していただくために政府機関の方々と面談できた事は成果であり、労を尽くしていただいたルーベン・ングウェンヤ特命全権大使、寒川富士夫(前)特命全権大使、その他多くの関係者に深く感謝致します。

投稿

帰国報告

平成23年度1次隊
理数科教師 新江梨佳

2011年6月から2年2ヶ月間、青年海外協力隊・理数科教師として、リロングウェ県北西部のンサルという村にあるンサル中高等学校に派遣され、近隣校を含めた理数科教育の質向上を目標とし、授業や課外活動、教員のサポート、学校間の連携づくりなど多様な活動を行ってきました。リロングウェ中心部からは車でオフロードを1時間強。比較的首都に近いながら素朴さが残る農村地域で、現地の人と密に関わる濃い時間を過ごしました。

現地の人の可能性を信じて

当初、青年海外協力隊という「自分の知識や技術を伝える」ことを想像していましたが、実際に現地を見てその感覚は変化。現地に根ざす経験や知識、それぞれの思いや考えを持った先生や生徒を目にし、「相手の力や可能性を場に繋げる」ことが私の活動の軸になりました。確かに多くの課題を抱えるマラウイの教育現場ですが、現状考えるべき点は、何が無いことや足りないことではなく、活かされていないことのように思え、現地の可能性がもっと表面化するだけで、外から新しいものを導入しなくても教育現場をまだまだ活発に面白くできると感じたのです。

生徒達の興味や意欲が実践につながるよう、生徒が手を動かして実験に取り組める授業を行ったり、課外活動として生徒主体の科学探究活動の場を設けました。また、多くの先生が力を授業へ反映できるよう、限られた器具を使い回せる環境を整えたり、先生同士の知識交換を促進したり、実際に授業で協力したりしました。

関わった人達の変化を感じられた部分もありながらも、成果を具体的に見える形で示す事は難しいのですが、自分なりに力を入れて実施し、現地で今もその影響が残っている事例の一つ紹介させていただきます。

サイエンスクラブの活動から

- Young Scientistsの登場 -

配属校で、科学好きの生徒達とサイエンスクラブを立ち上げました。生徒が自分達の興味や知識をもとに探求活動に取り組む場で、研究テーマ決めから実験計画、実験、考察、まとめ、そして発表まで生徒主体で進めます。最初のテーマとして彼らが取り組んだのは、「ソーラーヒーター」の作成。反射板で囲んだ空間に黒い缶を置き、集めた光エネルギーで缶の中の水を温めるというアイデアでした。はじめは「自分達でテーマを設定して探究活動を行う」というイメージがつかず、動き始めるこ

とすらできなかった生徒達が、少しのヒントをもとに自ら調べたり活発に議論をするようになり、試行錯誤を繰り返して実験を重ね、アイデアを実現させるまでに至りました。小さな箱型から始まった彼らの装置は、より効率よく光を集めるパラボラ型のソーラーヒーターになりました。その成果は校内発表をはじめ近隣校への訪問発表、National Science Fairという国の大会への出場にも繋がり、自分達の活動を自分達の言葉で伝える経験も積みました。「自分の力で新しいことができるようになった!」と、生徒達が自身の成長に手応えを感じ、キラキラしている姿は本当に素敵でした。

その活躍を見た先生達の共感や協力も得て、他校にもクラブが立ち上げられ、近隣校合同で、地域の人や子供達も招いての研究発表会(学校群でのScience Fair)を開催することへも発展しました。校長先生が「Young Scientistsだ!」と評価してくれたことを誇りに、生徒達は活動し続けていました。

そしてさらに、このYoung Scientistsの中で、卒業後・私の帰国後も、自身の村で研究活動を続けている生徒がいるとの連絡を受けました。



▲村の子供たちと

Gerald Kadango、私の配属校の卒業生でサイエンスクラブのリーダーとして活躍していた生徒です。彼は今、電気のない自身の村で風力発電を試みています。「風をつかまえた少年」の本にもなっているWilliam Kamkwambaさんをご存知の方はそのイメージに続くものかもしれません。懐中電灯が灯る程度のわずかな電力ですが、マラウイの少年にとっての大きな成長



▲サイエンスクラブの活動



を感じました。彼からは新たな研究を楽しんでいる様子のレポートが届き、発電という成果もさることながら、その過程で彼が力を発揮し自らを成長させ続けていることが、私にとっての喜びでした。こうして力強く芽を出した彼の可能性が成長し続けていくことを支えられたらと、現地の同僚や日本の周囲の方々との活動を共有しながら、私も日本で新たな動きを始めていくところです。

人の可能性の素晴らしさや貴重さ、その可能性を信じて新たな一歩を踏み出すことで世界が鮮やかになる喜びを、マラウイの人と関わる中で強く感じられるようになった2年間でした。今後も、Geraldをはじめ、こういった世界の子供達や人々の可能性を見つけて伸ばせる活動を目指し、私も自分自身の可能性を信じて、新たなステージに進みたいと思います。

▲ 風力発電に挑戦する生徒

日本マラウイ協会 2013年9月～2014年2月 主な活動内容

(1) 2013.9.25	9月定例会、機関誌 KWACHA 第50号(記念号)発行
(2) 2013.10.5-6	グローバルフェスタ2013 出展
(3) 2013.10.23	10月定例会、ウォームハートプロジェクト審査
(4) 2013.11.20	11月定例会
(5) 2013.12.18	12月定例会・納会
(6) 2014.1.22	1月定例会
(7) 2014.2.19	2月定例会

日本マラウイ協会情報

■ 第32回通常総会のご案内

日本マラウイ協会は第32回通常総会を別紙の通り開催します。会員の皆様は同封の葉書にて出欠をご連絡下さい。

■ E-mail アドレス変更

当会のメールアドレスは平成25年10月1日より japan.malawi@gmail.com に変更になっております。以前の japan.malawi@auone.jp は平成25年9月末で使えなくなっておりますので、ご注意ください。

■ インターネットでラジオ番組

インターネットでマラウイのラジオ番組を聞くことができます。ZODIAK ONLINE というサイト <http://www.zodiakmalawi.com> で画面右上の「ON LINE RADIO」と書かれたボタンをクリックするとチェワ語のトークやマラウイの音楽が流れてきます。このラジオ局はリロングウェで95.1MHzで放送している Zodiak Broadcasting Station というFM局。マイクロソフトの Silverlight というソフトのインストールが必要ですが、入ってなければダウンロードを促す画面が出てきます。また、画面の左側ではマラウイのニュースも読めます。

■ KWACHA バックナンバー

当会は2014年2月26日に設立31周年を迎えましたが、設立時の機関紙 KWACHA 第1号から第51号(今号)までの全バックナンバーをPDFファイル化し、当会ホームページへ掲載しています。是非ご覧ください。 <http://www.joca.or.jp/malaw/malawi-j.htm> から「日本語」を選択、左端のメニューから「機関紙 KWACHA」をクリックすると、右ページに号数一覧が出てきますので、希望の号数をクリックしてください。

■ 日本マラウイ協会の刊行物

- (1) 国情紹介誌「Malawi - The Warm Heart of Africa」第2版(1994年7月発行)A4判40ページ 1部 1,000円(送料80円)
- (2) マラウイ旅行ガイド新訂第2版(1997年7月発行)「アフリカの暖かき心、湖とサバンナの大地へ」B5判108ページ 1部 1,200円(送料80円)

※チェワ語辞典統合改訂2版(2012年9月発行)は売切れしました。上記2種類を1冊ずつご注文の場合の送料は80円となります。送料は「クロネコヤマトのメール便」扱いで表示しています。購入ご希望の方は、本ページ最後の入会方法の欄に記載のいずれかの銀行口座宛に、代金および送料をお送りください。

●送金の前に、必ず注文内容(希望する「刊行物名」、「部数」、「発送先」、「申込者の氏名、電話番号」と、どちらの銀行口座に送金するかをメールでご連絡ください。

■ ご意見、ご質問をどうぞ

日本マラウイ協会に対するご意見、ご要望、ご質問などありましたら、下記当協会宛へご遠慮なくお寄せください。また、電子メールによるマラウイ関連情報の配信も行っておりますので、電子メールアドレスをお持ちで、ご希望の方は、あわせてご連絡ください。

■ 日本マラウイ協会 月次定例会

日本マラウイ協会では、原則毎月第3水曜日18:30～に、東京都内(原則：新宿区市谷のJICA地球ひろばセミナールーム)で、月次定例会を開催し、マラウイ関連の支援活動などについての討議や、マラウイ関係者間の情報交換などを行っております。参加は会員でなくても構いません。初めての方も大歓迎です。詳しくは当協会までお問い合わせください。

■ 日本マラウイ協会 入会方法等

入会申込書を当会ホームページからダウンロード (<http://www.h4.dion.ne.jp/~malawi/application.doc>) し、各項記入の上、E-mail添付で当会へお送り下さい。E-mailで入会希望の旨を連絡くださっても構いません。また、入会金と年会費の合計(個人正会員の場合 1,000円 + 3,000円 = 4,000円)を下記のいずれかの銀行口座へお送りください。継続会員の方の年会費(個人正会員の場合 3,000円)は、E-mailでご連絡の上、お送りください。いずれもどちらの口座に送金するかE-mailでお知らせください。

〒102-0082 東京都千代田区一番町23番地3

日本生命一番町ビル5階

公益社団法人 青年海外協力協会 気付 日本マラウイ協会

TEL: 03-6674-1331 E-mail: japan.malawi@gmail.com

(1)三菱東京UFJ銀行 東恵北寿支店 普通口座255739

口座名義：日本マラウイ協会事務局 貝塚光宗

(2)ゆうちょ銀行 〇一九店(ゼロイチキユウ店)

当座預金口座 0013125

口座名義：日本マラウイ協会

(ゆうちょ銀行から送金する場合は、口座番号：00190-7-13125)